

建材と建築家の情報誌

2026-Vol.29

# KENZAI NAVI Journal

Landscape Design interview 01

有限会社オンサイト計画設計事務所  
代表取締役/パートナー

鈴木 裕治

Landscape Design interview 02

株式会社日建設計  
都市・社会基盤部門  
ランドスケープデザイングループ  
ランドスケープ設計部 アソシエイト

岩田 友紀

Interview with a Green Designer

en 景観設計株式会社  
代表取締役

中山 大輔

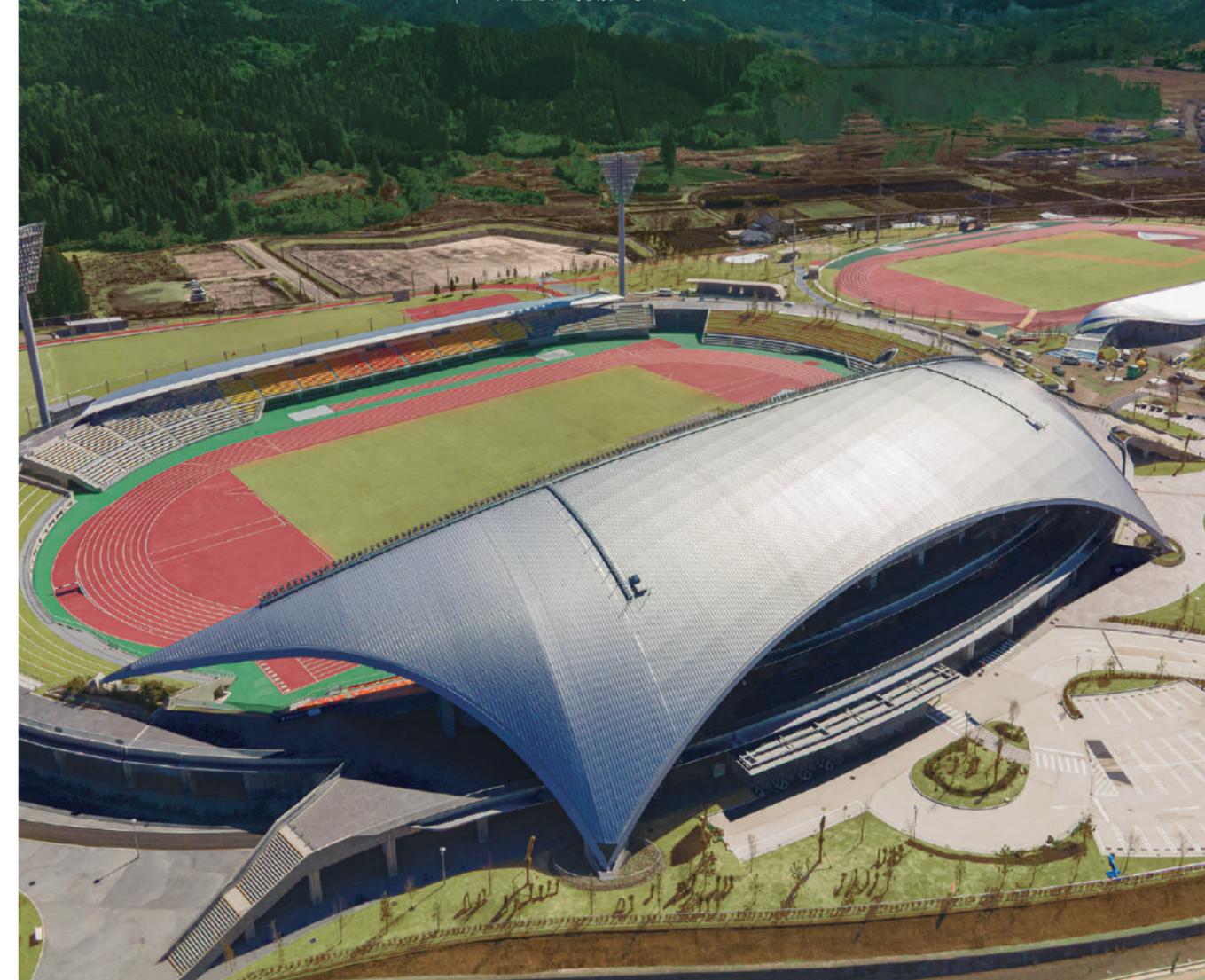
建築との絶妙なハーモニーが造る〈生きた風景〉

## ランドスケープデザインのあり方を考察

KENZAI NAVI Journal [建材ナビジャーナル] vol.29 発行：株式会社プログラフィック 〒160-0007 東京都新宿区荒木町 5-4 KUSAFUKA Bld. 4F Tel. 03-3225-3569

# 大地と歓声をつなぐ 曲線美

日出る国、宮崎県。山之口の景観になじむ、大地と調和した楕円球体の大屋根が誕生。  
当社の特殊技術「テーパーキャンバー加工」による屋根材成型を実施。  
ほとんどの屋根面が曲線で構成されたこれまでにない挑戦と技術が詰まった競技場の  
大屋根が完成しました。



### KUROKIRI STADIUM 宮崎県山之口陸上競技場

- 工事名：新宮崎県陸上競技場建設主体工事(1工区)
- 屋根仕様：R-T工法 フェライト系ステンレス鋼板(プラスト加工) t=0.4 mm 6,089㎡
- 所在地：宮崎県都市山之口町花木2381-4
- 施主：宮崎県
- 設計・監理：佐藤・益田建築設計・工事監理業務共同企業体
- 施工：清水・都北・下森特定建設工事共同企業体



空と人のあいだに  
三晃金属工業株式会社



三晃金属工業株式会社

〒108-0014 東京都港区芝5丁目34-2  
<https://www.sankometal.co.jp>



# KENZAI NAVI Journal

2026—Vol.29

## CONTENTS

### 04 Landscape Design

建築との絶妙なハーモニーが造る〈生きた風景〉

## ランドスケープデザインのあり方を考察

### 06 Landscape Design Interview 1

ランドスケープアーキテクトが説く  
愛される風景のつくりかた

有限会社オンサイト計画設計事務所 代表取締役/パートナー 鈴木 裕治



### 12 Landscape Design interview 2

建築との絶妙なハーモニーから生まれる新たな風景  
ランドスケープデザインのあり方

株式会社日建設計 都市・社会基盤部門ランドスケープデザイングループ  
ランドスケープ設計部 アソシエイト 岩田 友紀



### 18 Interview with a Green Designer

「持続可能」から「再生と回復」への道のり  
元金融マンの造園家が語る“リワイルディング”な空間づくり

en 景観設計株式会社 代表取締役 中山 大輔

### 22 PROJECT STORY

## 出会いと創造

24 日本の伝統美・越前瓦とイタリアン大理石  
魅せる壁 - 〈和 vs 欧〉 意表を突く造形美の競演  
株式会社 翔洋 × 株式会社 吉光工業 株式会社 Anonimo Design

28 マンション居住者に提供する、安全・安心な手すり  
広い場所で長く連続した構築が可能「NEXTAIL®」  
横浜市マンション理事会 × 矢崎化工株式会社

### 32 MANUFACTURER

34 理想の空間づくりに寄り添うブランドとして  
キャン'エンタープライゼス株式会社

36 デュボン™ ザバーン® 防草シートで草刈りが不要に  
株式会社グリーンフィールド

### 38 INFORMATION

SumaiRing / かたなび

Only One club

# MACHI SCAPE

オンリーワンマチスケープ創刊

エクステリア&ガーデンの総合メーカー オンリーワンクラブより、集合住宅、小規模店舗、教育・福祉施設といった非戸建て空間を彩る提案カタログ「マチスケープ」を創刊いたします。素敵な施工事例や実用プランの他、各種サイン、ファサードアイテム、ガーデンアイテムなどのおすすめ商品を多数掲載した充実の内容となっております。

マチを創り、人を繋ぐ、  
非戸建て向け提案。

2026.4  
Debut



施工事例、実用プラン、おすすめアイテムを多数掲載。

株式会社 オンリーワンクラブ  
〒461-0004 愛知県名古屋市中区葵3-23-10  
千種ファーストビルかとう7階  
www.onlyoneclub.jp



カタログはこちら 公式サイト

建築との絶妙なハーモニーが造る〈生きた風景〉

# ランドスケープデザインのあり方を考察



株式会社日建設計  
都市・社会基盤部門ランドスケープデザイングループ  
ランドスケープ設計部 アソシエイト

岩田 友紀

星野リゾート「星のや」シリーズをはじめ、数々の象徴的なプロジェクトを手掛けてきた鈴木さんは、ランドスケープデザインを通して都市と自然の在り方、そして人と空間の幸福な関係性の構築を追求する。また、大阪・関西万博など社会的注目度の高い大型プロジェクトに参加する中で、建築とランドスケープの一体化を体現する岩田さん。

お二人の共通点は、ランドスケープアーキテクトとして「人々に愛される空間」づくりに情熱を燃やし続けていること。本日は、ランドスケープデザインの先駆者としてのお二人に、其々が持つ独自のセオリーと今後の展望を伺いました。



有限会社オンサイト計画設計事務所  
代表取締役／パートナー

鈴木 裕治

interview

1

# Landscapescape Design

## ランドスケープアーキテクトが説く

## 愛される風景のつくりかた

「建築は敷地に「からつくりあげるものですが、ランドスケープは木を植えたり、一手間加えるだけでその場所が一変するくらい、広く深い可能性が潜んでいる」そう語るのは、オンサイト計画設計事務所を率いるランドスケープアーキテクトの鈴木氏、星野リゾート「星のや」シリーズをはじめ、数々の象徴的なプロジェクトを手掛けてきた鈴木氏は、どのようにして土地の記憶を読み解き、人々の心地よい「居場所」を創出してきたのでしょうか。ランドスケープデザインで体现する都市と自然の在り方、そして人と空間の幸福な関係性を築くためのヒントなどを伺いました。

## 原点はプログラミング。

## 「人が好き」で選んだ

## ランドスケープへの道

—最初に、鈴木さんがこの道を志したきっかけについてお伺いしたいのですが。

鈴木 私は小さい頃から電子工作やコンピューターが好きでした。皆が外でワイワイ騒いでいる中で、私は中学生ぐらいから、すでにプログラミングができるスキルがあり、将来はプログラマーの道に進むのだろうと

思っていました。

ただ、大学に行く時に「何か違うな」という気がして。その原因は、私が「人好き」だったからです。人が好きなのに家に籠もって黙々と仕事をするのがしっくりこない。あとは「このままだと友達や彼女ができないのではないか」という危機感もありました（笑）。

その後、大学進学のタイミングに建築学科で環境デザインを学ぶことになったのですが、環境デザインクラスは建

築以外にも、プロダクトから

都市計画まで人にまつわるデザインを広く学ぶクラスでした。その中に「ランドスケープ」という分野があり、学んでみたらすごく面白かった。建築は一からつくりあげるものですが、ランドスケープは木を植えたり、一手間加えるだけでその場が一変するくらい、

広く深い可能性が潜んでいることに気づきました。今後はランドスケープが世の中の希望を見出すきっかけになるの

ではないかと興味が湧き、専攻することになりました。

## 建築家や行政との

## 折衝と調整、

## そして合意形成へ

—ランドスケープデザインの業務で、特にご苦労されたプロジェクトや、印象に残っているエピソードなどをお聞かせください。

鈴木 そうですね。これはデザインそのものというより、ラン

ドスケープデザインを実現する

ために、まだ社会が成熟していない中でのうかたちを実現していくかという点ですごく高い壁を感じました。デザインは好き放題絵が描けるのですが、それを形にするのは難しい。

特に難しかったのは、2000年代初期に私がランドスケープ主任技術者として関わった「東雲（しののめ）キャナルコート」というプロジェクトでした。工場の跡地をUR（当時は公団）が再開発する案件で、伊

有限会社オンサイト計画設計事務所  
代表取締役／パートナー

## 鈴木 裕治

## PROFILE (すずき ゆうじ)

1968年鎌倉生まれ横浜育ち。1991年関東学院大学工学部第一部建築学科環境デザインクラス修了同大学関和明研究室研究生、ササキエンバイロメントデザインオフィスを経て1998年有限会社オンサイト計画設計事務所を共同設立。現在代表取締役パートナー。登録ランドスケープアーキテクト(RLA00260)。一級建築士、一級造園施工管理技士、自然再生士。千葉大学・東京都立大学・東京電機大学非常勤講師。



有限会社オンサイト計画設計事務所  
東京都港区芝3丁目24番1号 駿河ビル5F  
03-5444-3166

オンサイト計画設計事務所  
<https://www.s-onsite.com/>



一般社団法人 ランドスケープアーキテクト連盟



東豊雄さん、隈研吾さん、山本理顕さんをはじめ、名だたる建築家が6組ほど呼ばれていました。ランドスケープからは建物を建てるための骨格や、各街区のデザインをしなければならず、建築家の先生方も我々の意見に耳を傾けてはくれませんが、調整や合意形成が楽しくもありましたが、苦労しました。

さらに大変で不毛と感じたのは公団側との折衝です。これだけ大きな街区だと建築、外構さらには設計、施工で担当者がすべて縦割りになり、本来まとめるべき彼らの代わりに設計側がその橋渡しをしてまとめないといけない。やりたいことを提案しても「今までの手続きから外れるからできません」と言われる。そこで「できないことをやるためにどうすればいいんですか？」と必死に戦いました。

全体の竣工まで10年くらいかかったのですが、途中、本当に病みそうになって暴露本を書こうかと思ったりくらいです（笑）。でも結果として、住んでいる人にとっては素晴らしい場所

ができ、自分の心も収まりました。社会でランドスケープを実現するハードルの高さを経験した事例です。

その後、汐留の日本テレビや大阪ABC放送のある「ほたるまち」など、複数の地権者がいる再開発のプロジェクトで「一体に見えるランドスケープデザインを提案してほしい」と依頼されることがありました。地権者の調整役になるわけですが、意外とそれが楽しいのです。そっぽを向いている地権者に向けて具体的な絵を見せると、デザインを通じて「これを実現したいから一緒にやりましょう」という空気が生まれてくる。デザインを通じて人の気持ちややりたいことが動いていくことに感動し、勉強になりました。

### 「機能」と「無用の用」

——ランドスケープの最も重要な「機能」についても伺えますか？

鈴木 「居場所」という話をしましたが、居場所は心地よくな

いと人が居つきません。その心地よさを作る機能は何かと考えると、プロダクトレベルまで落ちてきます。例えば、座り心地がいい家具。外のベンチは座りやすい高さにとだ平らな面があるだけだったりしますが、ラ

グジュアリーな家具のような座り心地を考慮したデザインが施

されていると、心が惹きつけられます。それが機能としての心地よさに繋がります。

建築は「何平米の部屋」「何の機能」というプログラムを解く設計ですが、ランドスケープは具体的な機能を与えられないことが多い。「何かデザインしてください」とだけ言われる。

そこで、場所の歴史や使われ方を踏まえて、「この場所にはこういう機能があつたほうがいい」と我々が探し出すのです。

建築には「用」がありますが、ランドスケープには「無用の用」があると聞いています。一見無駄に見えるものが、実は機能としてデザインされなければなら

ない。その「無用の用」とは何かをいつも考えています。

### 「星のや東京」が

目指した都市の広場とは

——都市の広場としての「星のや東京」については、どのようなことを意識してデザインされたのでしょうか。

鈴木 「星のや東京」は、東京の大手町というオフィスビルのど真ん中に温泉旅館を建てるというプロジェクトでパートナーの長谷川と共にデザインに関わりました。本来、温泉旅館は自然の中であり、堀に囲まれて庭を通って玄関に着くものですが、ここは周りがビルと地続きです。

東京という場所柄、インパウンドの方も多い。そこで、日本の文化を第一に感じてもらいたいと考えました。パートナーの長谷川とも議論し、着物の帯や江戸小紋のような繊細なパターンを古来からある造園技法で表現することにしました。着物の帯が地面に敷かれているようなイメージで、自然素材や職人



### 星のや東京

周りの巨大な再開発やビル群に対して、ヒューマンスケールのエントランスを設えることで、堀などを設けずとも旅館前庭としての特別な領域感を醸成し、都市とつながる広場のような場を実現。



技を感じさせるテクスチャーを用いれば、オフィス街の巨大なスケールの中に手作り感のある「別の場所」としての感覚を作れるのではないかと。

丸の内通から連続しつつも、エリアに入ったら「温泉旅館にきた」という到着感を感じてもらえるように、地面に「帯」のようなデザインを敷き詰め、その上にお盆（ビル）を乗せるような構成にしました。閉ざすのではなく、イベントなどとも連携して人が座れるようにしつつ、ひっそりとした雰囲気も感じられる場所を目指しました。

### 土地の文化を継承する、星野リゾートの哲学

星野リゾートのブランドの強みについてはどうお考えですか？

鈴木 私は「星のや軽井沢」が最初に関わった案件で、星野代表と10年、15年と議論を重ねてきました。星野さんのリゾート作りは、他のブランドのようはどこでも同じものを作るのではなく、その土地の歴史や文化を

徹底的に掘り起こし、その場に合ったものを一からデザインします。

一度作ったらスクラップ・アンド・ビルドではなく、そこで文化が生まれ歴史が育まれる場所として非日常空間として長く続くものを作ろうとしている。それがブランドの価値に繋がっていると思います。また、星野さんはこちらの考えをスムーズに実現させてくれるクライアントです。しかしながらブレゼンで代表が違和感を感じたところから議論が発展し、「もつとこう変えたほうがいい」といったディスカッションが建築家も含めて行われ、質が向上します。そこがすごいところだと思います。

星野リゾートのプロジェクトで、特に思い出に残っている場所はありますか？

鈴木 一番好きなのはと聞かれたら、やはり「星のや軽井沢」ですね。構想から竣工まで10年以上かかり、さらに開業から20年経ってリニューアルしながら歴史を積み重ねてい

ます。

次に「星のや京都」。ここは役所の手続きだけで2〜3年かかりましたが、小川治兵衛という庭園作家が作った庭を、加藤造園さんと議論しながら新しい手法で蘇らせることができました。

もう一つは「星のや竹富島」です。竹富島には伝統的建造物群保存地区の竹富島憲章がありますが、それに完全に従って一から集落を作った唯一無二のリゾートです。当初は島民の反対もありましたが、星野さんが合意形成を重ね、結果として島の文化や生活を体験できる素晴らしい場所になりました。竹富島に泊まるなら連泊をおすすめします。1泊じゃもったいないです（笑）。

インスピレーションを受ける瞬間とはどのような時ですか？

鈴木 意外とシンプルで、自然現象に感動した時ですね。アメリカのセドナやモニュメントバレーのような荒野で、太陽の動きや地平線を肌で感じた時など

です。

地球の中のちっぽけな自分を感じた時の感動を、デザインに活かしています。パートナーの三谷とデザインした、YKKのビル（YKK80ビル）では、「風見魚」というオブジェを並べて、ビルの谷間の複雑な風の動きを可視化したり、水盤（ミラー）を使って普段見えない雲の動きを映し込んだりしました。

日本庭園も「ここから見るとこういう世界観がある」という実験場のようなものです。そういった自然の動きへの気づきを植物と共に仕掛けて、地球の上で生きていると言う世界観を感じさせることも、常に意識しています。

### 「来た時よりも美しく」次世代へ繋ぐバトン

ランドスケープアーキテクト連盟（JLAU）での活動についても伺えますか。

鈴木 JLAUの副会長の一人として「ローカルネットワーク」を担当しています。日本においてローカル、つまり地方は

多様性の宝庫です。それぞれの土地で庭園や観光などに携わっている人たちがバラバラに活動しているのを、プラットフォームを作って繋げています。会員がやりたい部会をそれぞれ立ち上げてもらい、セミナーやフィールドワークを展開することで、ランドスケープの社会的認知度を高めていきたいと考えています。

現代におけるランドスケープデザインの役割や課題、今後挑戦したいテーマについて教えてください。

鈴木 「来た時よりも美しく」という言葉を大切にしています。人が入ることで自然が汚れるのではなく、デザインされた風景があることで、人がそこを愛し、管理し、きれいに保たれる。そういう「愛される風景」を作ることが役割であり課題だと思っています。

今は社会的に、グリーンインフラやSDGsといった言葉が叫ばれていますが、これはもともと我々は昔からやっていたことです。それをさら

に高みに上げていきたい。「地球に優しい」という言葉はあまり好きじゃなくて、「人間に優しい」でいいじゃないかと（笑）。人間が使っていく以上、ウェルビーイングや人の幸せ、コミュニケーションが生まれ、場所も人も良くなっていく循環を作る。そんな環境を作っていきたいですね。

最後に、注目の素材や製品などがあれば教えてください。

鈴木 素材で言えば、例えば木材をアセチル化して腐りにくくする技術など、既存の素材の弱点を克服したものが気になります。また、ランドスケープの分野では、デザイナーがいない場所でも使える「既製品のプロダクト」がもつと充実するといいなと思っています。ちょっとしたシェルターやパーゴラ、テレワークができるカプセルなど、デザインされた良い製品があれば、役所の方などが公園に簡単に導入でき、空間の質が上がります。

建築的な視点を持ったランドスケーププロダクトには可



星のや軽井沢

浅間山麓の地形と清流を生かし、森と水の循環を尊重して計画されたリゾート。歩くたびに光や風景が移ろい、自然と共生するランドスケープが滞在体験を形づくる。

能性があると感じています。

温暖化で日差しが強くなる中、フラクタル日除けのようなものや、人が包まれていると感じられる「巢」のような落ち着く空間。そういった屋根や覆いのある場所を作ることとは、建築的な知識も必要ですが、ランドスケープとして売り出せばヒットするのではないかと思います。



秋葉 早紀 (あきは・さき)  
建材ナビ広報担当  
二級建築士

「ランドスケープには無用の用がある」というお言葉に、居場所の考え方や、あえて「何も置かないこと」に価値を見出す「余白」にもランドスケープの奥深さがあるように感じ、デザインの本質を垣間見た気がしました。

INTERVIEWER

建築との絶妙なハーモニーから生まれる新たな風景

## ランドスケープデザインのある方

建築学科で学びながら「ランドスケープ」の存在に心を奪われ、現在は日建設で一級建築士と一級造園施工管理技士の両資格を活かしながら、建築と外部環境を一体で考えるデザインに携わる岩田友紀さん。

大阪・関西万博「静けさの森」やJR熊本駅ビルなど、大規模かつ社会的注目度の高いプロジェクトに参加する中で、自然と向き合う姿勢、設計と調整の裏側、現場での判断、そしてこれからのランドスケープのあり方などについて語っていただいた。

### 「建築のまわりの

余白の空間」に初めて

### 意味が宿った瞬間

「まず、ランドスケープとの出会いについて教えてください。」

岩田 私は神戸大学で建築を学んでいたのですが、学生の頃は当然、建物そのものをつくる仕事をするのだろうと思っていました。そんな中で転機になったのが、大学で唯一受けたランドスケープの課題です。当時、立命館大学にいらした武田史朗先生が講義に来られ、私の課題に興味を持って、丁寧に講評してくださいました。そのとき、「建物の周りに広がる、よくわからない白い部分」も、実は名前のあるデザイン領域なんだよ」と言われたのです。それまで、敷地境界線の外側や建物の周囲はどう処理して良いかわからない部分でした。

しかし、先生の言葉で、その余白だと考えていた空間に初めて意味が宿りました。

「ここも設計していい」「ここにも可能性がある」と気づいた瞬間、建築の世界が一気に広がりました。そこから、独学でランドスケープを勉強し始め、卒業設計もその方向へ寄っていききました。その後、オンサイト計画設計事務所に入り、ランドスケープがお世話になり、ランドスケープが持つ奥深さ、土や植物と向き合う生々しい感覚に触れたことで、さらにのめり込みました。

### 建築とランドスケープを

分けずに考えるために

### 日建設へ

「日建設を選ばれた理由は

何だったのでしょうか？」

岩田 建築とランドスケープを別々に設計する文化に、学生の頃からどこか違和感を持っていました。建築は建築家、外部空間は外部の専門家が担当するという明確な分業が一般的でしたが、実際には外部が建築の価値や人の体験を大きく左右します。

東京ミッドタウンのように、建物と外部が深く関係し合うようなプロジェクトを見て、「こういう仕事がしたい」と強く

株式会社日建設  
都市・社会基盤部門ランドスケープデザイングループ  
ランドスケープ設計部  
アソシエイト

## 岩田 友紀

### PROFILE (いわた・ゆき)

入社以来、公共施設、オフィス、学校、商業施設のランドスケープデザインをはじめ国内外幅広くプロジェクトを手がける。美しさと機能性を融合させた空間を得意としており、歴史なども理解して、街の雰囲気との調和を大切にデザインを心掛けている。

日本造園学会賞、土木学会デザイン賞、SABED環境シミュレーション設計賞を受賞。一級建築士、一級造園施工管理技士。神戸大学非常勤講師。



株式会社日建設  
東京都千代田区飯田橋 2-18-3  
03-5226-3030

# Landscape Design



く思いました。日建設計なら、建築とランドスケープが同じテーブルで議論できる環境があり、ひとつの風景を共につくることができる。それが入社を決め手になりました。

でも当時はまだ、ランドスケープの範疇は狭く、家族に「ランドスケープの仕事をする」と言っても、正直あまり伝わりませんでした（笑）。ですが、ここ十数年で社会の中での役割も

かなり理解されるようになり、建築とランドスケープを総合的に捉える重要性が広く受け入れられてきたと感じます。

**多様な立場の人と向き合う、**

**ランドスケープならではの難しさ**

業務で大変だと感じる点を教えてください。

岩田 ランドスケープは、多くの人が意見を持てる領域です。「緑があった方がいい」「もっと開放的にした方がいい」「木は低い方が安全だ」など、誰でも語れるテーマだからこそ、関わる人も多くなります。そこが難しくもあり、面白くもある部分ですね。

特に大規模プロジェクトになると、行政・事業者・地域住民・商業テナントなど、多数のステークホルダーと対話しながら進めていきます。ランドスケープは人の生活や街の印象に直結するので、それぞれの視点を丁寧に聞きつつ、プロとしての提案に落とし込む必要があります。

しかし、周りの意見をただまとめると、どこかぼんやりした案になってしまっているので、「プロとしての意志」と「関係者の納得」を両立させるバランスが重要だと思えます。「なぜこの形か」「なぜこの密度か」「なぜこの動線なのか」その理由を言語化し、共有しながら進めるようにしています。

**図面では決まらない。**

**現場で判断する**

**“生きた風景”**

植物を扱う難しさにどのように対応されていますか。

岩田 ランドスケープの現場は、図面どおりにはいかないことが多いんです。植物は一本一本形が違うし、地形も“生きた状態”で見ると、平面図の印象とは全く異なります。だから、現場での判断、つまり“目の前にあるものをどう生かすか”という力が非常に大切です。

現場での材料検査では、実際に植える木を一本ずつ確認します。まっすぐ立っている木、少し曲がっている木、枝ぶりが個

性的な木……同じ樹種でも性格がまるで違う。その個性を読み取り、どこに配置すると最も魅力が出るのか考えます。

**図面には表れない判断がたくさんあるのですね。**

岩田 本場にそうなんです。木の足元の陰影や、隣り合う木との“間”の取り方などは、現場でしか分からないことも多い。施工中に「やっぱりこの木はもう少し前に出した方がいい」とか「こっこの枝を見せよう」など、繊細な調整を何度も行います。泥臭い作業ですが、完成したときの風景にはその積み重ねが確実に現れます。

**「共有されるデザイン」を目指す理由**

デザインするうえで、特に意識していることはありますか？

岩田 “共有されるデザイン”であることを大事にしています。大規模プロジェクトでは、一人の設計者やデザイナーがすべて決めるわけではなく、複

数の専門家が協働し、合意形成をしながら進めていきます。そのため、感覚だけではなく、理由や論理を言語化できることが不可欠です。

「なぜこうするのか」を説明できれば、チーム全体で役職や年次にかかわらず対等にデザインの議論を行うことができます。デザインを共有して育てるというプロセスは、組織で仕事をするうえでも重要だと思っています。

チームで共有しやすい工夫として、3Dモデルやシミュレーションを使い、形状や動線の説得力を視覚的に示すようにしています。単に“カッコいいから”ではなく、“こういう理由でこうなっている”という根拠が伝わると、関係者全員の理解が深まり、より良い議論が生まれます。

**万博「静けさの森」**

**で挑戦した、**

**コンパクトな“深い森”**

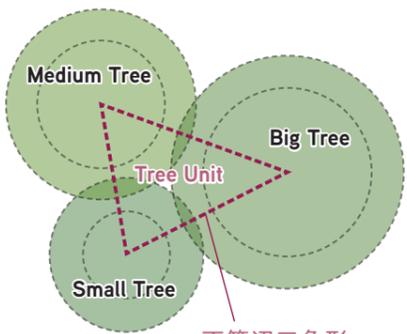
万博の「静けさの森」は大きなプロジェクトでしたね。

岩田 あの森は面積こそ2ヘクタールですが、“深さ”をどう演出するかが大きなテーマでした。外の賑わいから一歩入ると、空気が柔らかく変わり、音が消えていくような体験ができればよいと考えていました。密度の違う植栽を組み合わせたたり、微地形をつけて歩くスピードが変わるようにしたり、視界が絞られる瞬間と抜ける瞬間を繰り返すなど、細かな仕掛けを重ねました。実際、体験した方々から「方向感覚がわからなくなり、だんだん中に吸い込まれていくような感覚になった」などの感想を多くいただき、このようなパブリックスペースにおけるプロジェクトの醍醐味を感じることができました。

万博会場の夢洲（ゆめしま）に、約1500本の木を植えるというプロジェクトはいかがでしたか。

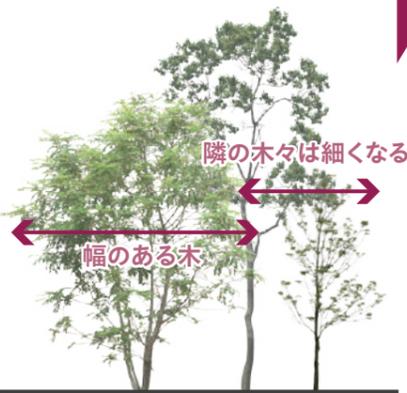
岩田 一番苦労したのは、やはり規模の大きさです。今まで私が扱っていたプロジェクトと比べても面積も広いし、木の本数も多い。この規模で、今まで通

**自然な樹木配置を実現するルール**



不等辺三角形

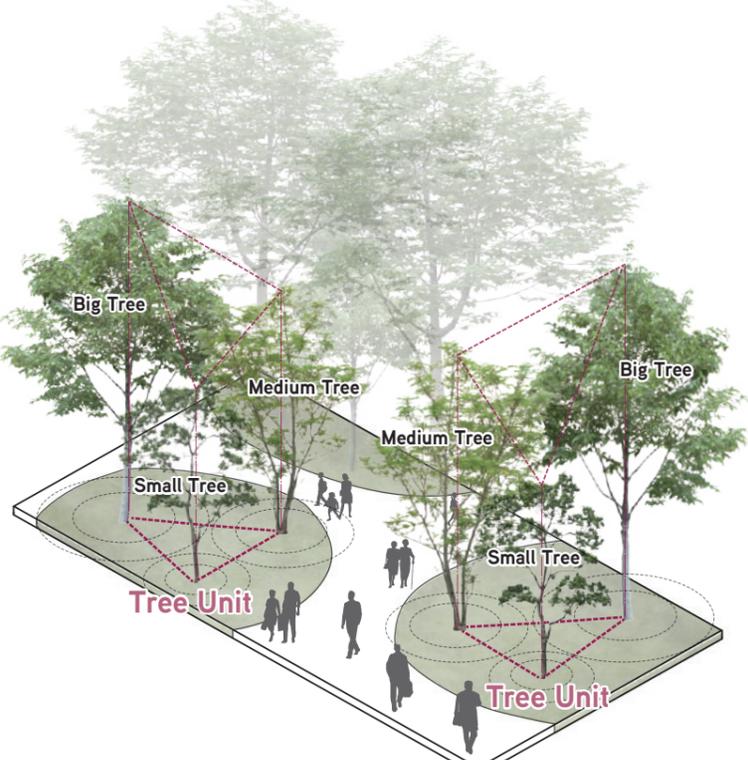
高木3本で1セットのユニットを作る



隣の木々は細くなる

幅のある木

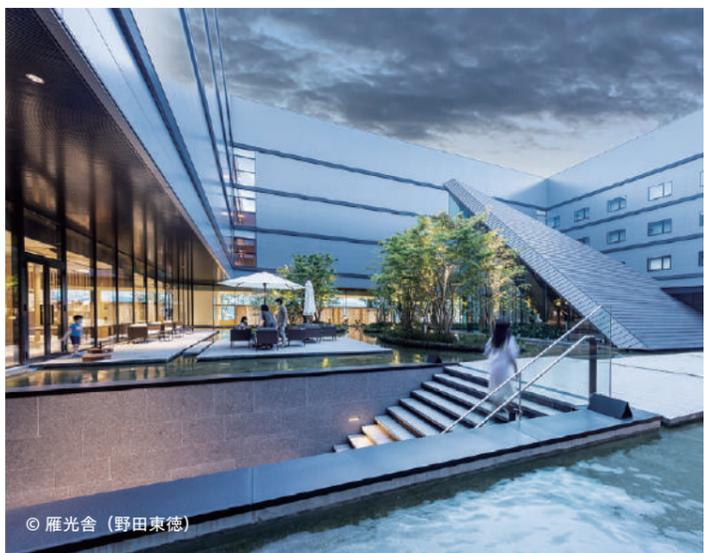
Tree Unit



異例・混交を満たすようなユニットを作る  
ユニットを粗密をつけて繰り返し配置する



© 雁光舎 (野田東徳)



© 雁光舎 (野田東徳)

りの「設計をして、現場に立ち会って、場所を決める」というやり方を想像するだけでかなり悩んでいました。そこで今回、社内のデジタルデザインチームとコラボレーションして、1500本の木の配置をコンピューターを使って検討することにしました。自然とは本来、多くのアルゴリズムのかけあわせによって出来ています。自然を再現するようなプロジェクトでは自然のシステムにならうデザインを行う手法としてデジタルデザインは相性が良いと感じました。それに、困ったことが新しい設計手法やコンセプトに繋がっていく体験ができたのは大きかったです。

「静けさの森」の場合はお題がはっきりしていて、「パビリオンの喧騒から離れて、自然と向き合い、自分と向き合う静かな空間」にするため、だんだん内側に行くにつれて木が密になっていく計画でした。それを実現するプランをデザインディレクターである忽那裕樹(くつなひろき)さんと

練っていきました。プラン上の形だけでなく、来場者の視点(アイレベル)で、中に入っていくにつれて視界が緑で遮られていくような仕掛けになっています。

### JR 熊本駅ビルで意識した「地域らしさ」の再解釈

「JR 熊本駅ビルではどんな点を意識しましたか？」

岩田 熊本の風土は、水と緑が豊かなことが大きな特徴です。その魅力を駅前という都市空間でどう再解釈し、再現するかテーマでした。湧水をモチーフにした水景を取り入れたり、地元の気候に合う植生を中心に選定したり、地域らしい風景の「らしさ」を損なわず、都市として洗練させることを目指しました。多くの関係者と議論しながら進めたので調整は大変でしたが、むしろそれがプロジェクトに深みを与えたと思います。

「室内での緑化という難しさへの取り組みにはどのように対

処されましたか。」

岩田 室内緑化においては外から入る光が生命線となるため、できるだけ明るい場所を見つけて緑を配置することが重要でした。チャレンジングだったのは「自然を感じる事ができる」というコンセプトでした。これまでの室内緑化は、トロピカルな南国系の観葉植物を使うことが多かったのですが、それでは熊本の自然を感じてもらえないだろうと。そこで、実際に熊本の山に生えているような在来種の樹種を調査した上で、室内の環境でも生育できるものを選定し、取り込んでいきました。

あとは「水」ですね。建物の中に水を取り入れることで建物の性能が落ちてしまつては本末転倒なので、納まりや防水の関係も含めてすぐ検討しました。私は建築出身なので、建築を第一の専門に持つランドスケープアーキテクトだからこそできる部分かなと思つて、頑張つたところです。配管や梁との取り合いなど、早い段階で詰めていきました。

### 完成した瞬間がゴールではなく、時間とともに育っていく風景を見守る

「これからのランドスケープデザインは、どのように変わっていくと思いますか？」

岩田 まずは、皆さんが「緑を取り入れたい」とおっしゃるよ



大阪・関西万博の「静けさの森」

万博会場という大きな人流と情報に満ちた環境の中に、あえて「静けさ」という対照的な体験を埋め込むことを目指している。動線や視線の抜け、植栽の配置を丁寧に重ねることで、人が自然と歩みを緩め、周囲との距離感を取り戻せる場を構成。

うになつて、活躍の場が広がつていて嬉しいなと思います。ここ15年ぐらいで、建築とランドスケープが密接に関係してパブリックスペースを作っていく事例がすごく増えました。今後は、建築設計者とランドスケープアーキテクトが本当に一体となつてデザインしていくことが増えていくと思つています。街のつくり方が変わり、自然の扱われ方も変わってきました。建築とランドスケープの境界がどんどん曖昧になり、相互に影響し合う存在に

なっています。これからは、建物中心ではなく、人の体験や環境の変化を軸に「包括的に風景を設計する」時代になると思います。

個人的には、一人の強いクリエイターが引張るのではなく、チームの知識や議論が反映された「共有されるデザイン」を積み重ねることを大切にしていきたい。そして、完成した瞬間がゴールではなく、時間とともに育っていく風景を、多くの人とともに見守っていける仕事をしたいと思っています。

### JR 熊本駅ビル

熊本を象徴する滝や樹木をモチーフに、水と緑が重層的に連なる「水と緑の立体庭園」を整備し、駅ビル内部にしながら自然を身近に感じられる空間を実現している。

秋葉 早紀 (あきば・さき)  
建材ナビ広報担当  
二級建築士

実際に万博に行った際に感じた、賑わいから切り離された「静けさの森」での没入体験は、計算し尽くされたものだとわかり、単なる緑化ではないランドスケープデザインに触れることが出来、その存在意義を深く考える機会となりました。



INTERVIEWER



PROFILE

en 景観設計株式会社  
代表取締役

中山 大輔

NAKAYAMA DAISUKE

(なかやま・だいすけ)

グリーンデザイナー。1981年山口生まれ。武蔵野美術大学卒業後、金融業界に就職。その後、庭園デザイナーとして海外でも数多くの受賞歴を持つ石原和幸氏を師事。2014年en景観設計株式会社設立。現在、同社代表取締役。グリーンデザインやレンタル事業の他、エンドユーザー向け「HITOHACHI」の店舗運営やEC事業を展開する。手掛けた主な仕事に「BONUS TRACK」（下北沢）、「メルキュール京都ステーション」（京都）ほか多数。

en 景観設計株式会社

東京都港区南青山 2-7-1-102  
03-5843-1828

EN LANDSCAPE DESIGN  
<https://enlandscape.co.jp/>



「持続可能」から「再生と回復」への道のり

Interview with a Green Designer

# 元金融マンの造園家が語る ”リワイールディング“な空間づくり

建築における植栽の役割が、今、大きく変わろうとしている。かつては建物の「装飾」として扱われることが多かった緑だが、サステナビリティやウェルビーイングへの意識の高まりと共に、空間の質を決定づける本質的な要素としての価値が見直されているのだ。今回お話を伺ったのは、園（EN）を主宰する造園家・中山氏。「昆虫博士」と呼ばれた幼少期、美大でのデザイン学習、そして金融業界での経験という異色の経歴を持つ彼は、生物学的な視点とビジネス感覚、そしてデザイン思考を融合させ、独自のランドスケープデザインを展開している。

異色の経歴、金融を経て気づいた「生物×デザイン」の可能性

——早速ですが、グリーンデザインを始めたきっかけを教えてください。

中山 このグリーンのデザイン業界に入った直接的なきっかけは、前職で石原和幸さんというガーデンデザイナーの

方の事務所で働いたことです。

僕は、小さい頃からグリーンというか、生き物が好きでした。小学生の頃は「昆虫博士」と言われるぐらい生き物が好きで、いつも外で遊んで虫を捕まえたりしていました（笑）。そういった幼少期を過ごし

て、将来も生物学というか、何か生き物に関わることをやりたいなと漠然と思っていました。それから中学生、高校

生ぐらいいなあって、ファッションやインテリアに興味を持ち

始めました。その頃読んでいた雑誌がおしゃれで、「自分もこういう部屋を作りたい」と思い、デザインをやってみて

思ったのがきっかけです。美術大学に入りました。ところが、美術大学を出た後にすぐにデザインの仕事に就いたわけではなく、少し横道を逸れて、経済やビジネス

の勉強をしたと思います、金融の仕事に就きました。

ただ、やはり金融の仕事は自分には合わないなと感じていた中で、次に選んだのが石原さんの会社だったので「生き物を扱うこと」と「デザインして空間をつくること」、その両方ができる仕事

だと思い、「これをやってみたい」と思ったのがきっかけです。

建築を邪魔せず、引き立てる。「調和」を生む植栽の哲学

——生き物である植物を扱う難しさをどのようにして克服しましたか。

中山 一つ大事なテーマにしているのは「調和」です。僕の会社の社名は「円（EN）」というんですが、これには「縁



（つながり）、「円（まどか調和）」、そして庭園や造園の「園」という意味を掛け合わせています。

独立した時に思ったのは、建築はすくつかっこいいのに、植栽がそれに合っていない。植栽がそれに合っているケースが多いということでした。せっかく建築がかっこいいなら、植栽もそれに合わせて調和したものがいい。周辺の環境や、クライアントの想い、ビジョンに調和した空間を作りたいというのが最初のテーマです。また、植物同士の調和も大切です。お互いが陽の光を分け合って育つようなバランス、日照条件や環境との調和を図ることが、植栽デザインの一番大事なことでないかと思っています。

実際の自然から学ぶことはすく多いです。山の中に入ると、高い木があって、その下に中くらいの木があり、さらにその下に低い木があって……と、環境に応じて植物が住む場所を分け合っています。お庭づくりでもスケールは小さ

くなりますが、高さの違う木々をバランスよく植えるなど、自然から学びながら落とし込んでいくところが一番重要です。

### 「サステナブル」から「再生」へ。世界的なトレンド「リワイディング」

世間の緑に対する印象やトレンドの変化を感じますか？

中山 僕が感じる一番のトレンドワードは「再生」とか「回復」なのではないかなと思います。今まで「サステナビリティ（持続可能性）」がメインでしたが、そこから一歩踏み込んで「再生していく」という考え方が注目されています。

最近聞いたのが、イギリスなどで出てきている「リワイディング（再野生化）」というキーワードです。今までは人間にとって都合のいいものだけを育ててきましたが、あえて整えない、手をかけずに自然のままにすることで、虫や動物のすみかを作っていく。

芝生も人が歩く場所以外は伸ばしっぱなしにして生態系を戻す、といった「再生」の流れが来ています。日本でも「大地の再生」というのが注目されています。昔ながらの石積みなどを直視して、コンクリートで固めずに水や空気の循環を良くし、土砂崩れを防ぐといった、自然の力を活かす手法が見直されています。

### 下北沢「BONUS TRACK」に見る、地域と共に育つ風景

最近話題になった「ポーンストラック（BONUS TRACK）」のプロジェクトについて、完成までのピソードをお聞かせください。

中山 最初に事業主である小田急さんから「商業施設の中に植栽をするのではなく、雑木林の中に商業施設ができたみたいな空間にしたい」というお話がありました。それにすぐ感銘を受けました。後からつけた植栽ではなく、もともとそこにあった自然の中に建物が建ったような、より自然な雰囲気を目指しました。

また、駅周辺に公園や人がゆとり留まれる場所が少なくという課題もあったので、外部スペースを広くとり、地域の方が過ごせる場所にしたいという要望がありました。夏は木陰を作り、冬は日向ぼっこができるような、緑に包まれた空間づくりを計画しました。

珍しい点として、メンテナンスをシモキタ園藝部という緑が好きな人々によって生まれた地域コミュニティが担当しています。僕たちが直接手入れをするのではなく、ボランティアの方々に「こうしてほしい」と伝えながら一緒に管理しています。プロが管理

### 下北沢「BONUS TRACK」

完成形を固定せず、使われながら育っていく“まちの余白”として構想されたプロジェクト。建築のあいだに生まれる外部空間を丁寧につなぐことで、人の行為や活動が自然に重なり合い、下北沢らしいにぎわいと偶発性を生み出している。



オフィスにおけるグリーン役についてはどうお考えですか？

中山 この10年ぐらいでオフィスにグリーンを入れるのが当たり前になりました。コロナ禍でリモートワークが増え、オフィスの需要が減るかと思いきや、逆にグリーンの需要は伸びています。オフィスが「作業する場所」から「みんなが集まる場所」へと役割が変わり、従業員が心地よく働ける環境を作るためにグリーンが求められているのだと思います。

して終わりではなく、地域の人々が植物に触れ、愛着を持って育てていくことで、より優しい空気が生まれていると思います。

ポーンストラックでは、ツバメアーキテクトさんと最初のコンセプトづくりの段階から一緒にやらせていただきました。「雑木林のような空間にしたい」という要望に対して、こういった植栽が可能か、舗装材はどうするかなどを建築側と一緒に考えました。

通常、商業施設だと建物と駐車場があつて余った場所が緑地になりますが、今回は全体を森の中のような空間にするために、どう植栽スペースを配置すればどこにいても緑を感じられるか、ということと一緒に計画しました。建築の計画がある程度固まる前に相談いただけると、より良い提案ができますね。

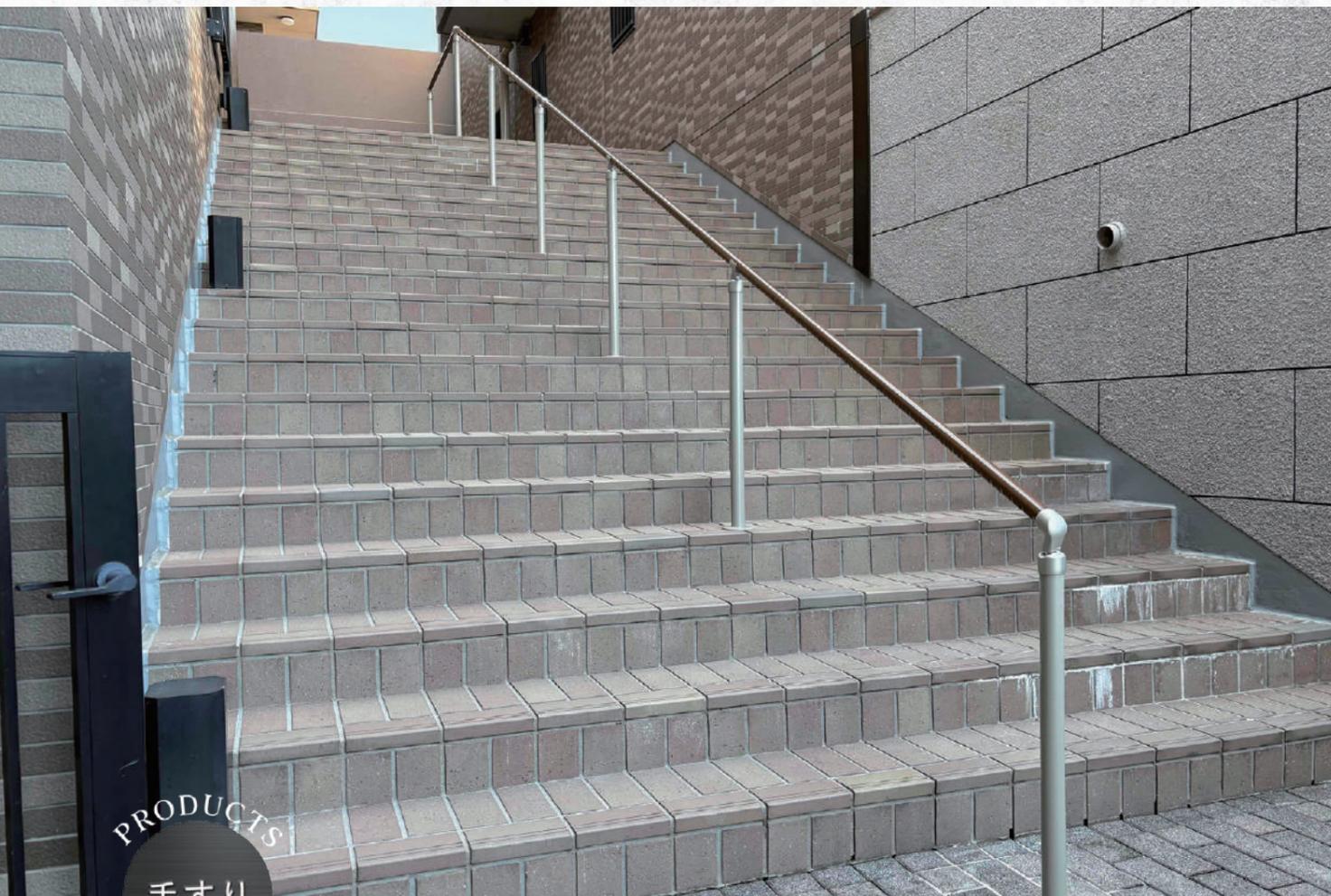
### オフィスは「集まる場所」へ。テクノロジと自然素材の融合

これからは、オフィス内で「植物が育つ環境」を作っていくことが課題です。現在はレンタルで定期的に交換して維持していますが、光が足りずに植物が弱ってしまうことが多いため、照明（植物育成ライト）や空調などを活用し、室内でも植物が健康に育つ環境をテクノロジの力で整えることが求められています。元気な植物があつてこそ、人も活力を得られると思います。



SumaiRing

建築家と建材メーカーはどのようにしてマッチングに至ったか。プロジェクトはどう完結したか。建材ナビを通じて知り合った、建築家と建材メーカーの両者にインタビュー。知り合いたいきさつ、施工案件の内容、施工のコンセプト、材料の選定と提供など、現場のリアルをたっぷり語っていただきました。建材ナビのインタビューコンテンツ「すまいりんぐ」でも同時紹介しています。



PRODUCTS

手すり

Vol.29

施主

横浜市 マンション理事会

建材メーカー

矢崎化工株式会社

マンション居住者に提供する、安全・安心な手すり

## 広い場所で長く連続した構築が可能

### 「NEXTAIL®」

横浜市港北区のマンション理事会と矢崎化工が手を取り合い、築25年の集合住宅で実現した手すり設置プロジェクトの舞台裏に迫ります。エレベーター更新期を控えた安全対策として、機能性とコストを両立する「NEXTAIL」を採用。独自の滑り止め形状や高い耐久性が、居住者の安心感をどう変えたのか。介護市場で培われたノウハウが集合住宅の景観に溶け込み、資産価値と生活の質を高めていく共創の軌跡を辿ります。



PRODUCTS

装飾瓦  
光壁

Vol.28

施主

株式会社 翔洋

建材メーカー

株式会社  
吉光工業

建材メーカー

株式会社  
Anonimo Design

日本の伝統美・越前瓦とイタリアン大理石

## 魅せる壁 —

### 〈和 vs 欧〉意表を突く造形美の競演

GINZA SIX に誕生した「イノベシアプレミアムサロン」を舞台に、翔洋、吉光工業、Anonimo Design の3社が共創したプロジェクトストーリー。日本の伝統美が宿る越前瓦と、イタリアン大理石の光壁という、文化も特性も異なる2つの素材が融合しました。「重さと光」「和と欧」の対比によって、ハイエンド空間に意表を突く造形美を生み出した、その設計と施工の軌跡に迫ります。

## 株式会社翔洋

今回、吉光工業の装飾瓦「Woven Ceramic Echizen」とAnonimo Designの「リトステザインハマー」を採用された決定的な理由は何でしたか？

イノベシアプレミアムサロンでは、意匠性だけでなく、空間としての説得力や長期的な価値を重視しました。吉光工業様の装飾瓦「Woven Ceramic Echizen」は、伝統素材でありながら現代的な表情と確かな施工

性を備え、空間に重厚な奥行きを与えてくれます。一方、Anonimo Design様の「リトステザインハマー」は、石材と光を融合させることで視線を惹きつけ、ハイエンド空間に求められる象徴性を担います。両者を組み合わせることで、静と動、重さと光の対比が成立すると判断したことが、採用の決定打でした。

全く異なる特性を持つ2種の素材を組み合わせることで、「GINZASIX」というプレミアムな空間にどのような相乗効果を期待しましたか。

日本の瓦とイタリア大理石の光壁という、用途や文化背景の異なる素材を組み合わせることで、単体では生まれなない伝統性と現代性が共存する奥行きと印象的な体験の創出を期待しました。吉光工業様の瓦が空間に安定感を与え、Anonimo Design様のリトステザインハマーは光と質感によって視線や動線に変化を生み出します。異

施主  
株式会社翔洋



建材メーカー  
株式会社吉光工業  
建材メーカー  
株式会社 Anonimo Design

## 日本の伝統美・越前瓦とイタリアン大理石 魅せる壁 ― 〈和VS欧〉意表を突く造形美の競演

### 株式会社吉光工業

今回、イノベシアプレミアムサロンに施工された装飾瓦「Woven Ceramic Echizen」について教えてください。

「Woven Ceramic Echizen」は建築家・工事店・瓦メーカーのチームで生み出した装飾材になります。越前瓦の産地・福井県は、良質な粘土が取れ日本六古窯の一つでもある越前焼があり、日本でも有数の繊維産地でもあります。

方法は特許を取得しています。割れても一枚から交換可能で、施工も簡単です。瓦は不燃材であるため、外装はもちろん内装でも制限なく使用でき、今回は内装の装飾として採用いただきました。越前瓦は1200℃前後の還元焼成で焼き上げ、独特の風合いを持った「銀鼠」は福井の街並みを彩ってきた色で、無釉で焼成する「窯変」は歩道やビルの外壁で使用されてきました。還元焼成特有の質感は建築家・デザイナーの方に気に入っていただけるものかと思えます。

今回の内装プロジェクトで、特に技術的に工夫した点や難しかった点はありましたか。

内装の装飾としての使用ということで、当初は間接照明も検討されており、光の広がり方を考えて、壁からの持ち出し寸法や細部の納まりについて検討をしていました。また重量があるため、下地の作り方についても検討をしてい

本商品は福井が持つ瓦と繊維の二つの産業の歴史文化の掛け合わせから発想した、立体的な平織状の意匠をもつ装飾壁です。瓦の持つ曲線を生かした形状は、一枚一枚手作りでプレスし製造しています。取付方法も通常のタイルとは違い、面に張り付けるのではなく、支持体から浮かせたワイヤーメッシュを下地としているため、重量感も感じさせながら軽やかなデザインになります。この新しい支持

ました。清掃の面も考えて、下のクリアランスを少し大きめにしておこうかなども考えていました。

施工の実績も踏まえて今後の展望をお聞かせください。

瓦という素材には地域・歴史・文化が内包されていて、今は右肩下がりの瓦産業を持続していくための取り組みの一つが「Woven Ceramic Echizen」という形になり、現在絶賛チャレンジ中です。意匠のユニークさの裏にある部分にも目を向けて、採用していただけると幸いです。福井の日本の瓦文化を持続的にするために、という大きなテーマと「Woven Ceramic」 という新しい手法で、日本に世界に発信して面白がってくれる方々とお会いできればと思います。オリジナルな商品を作りたいという方の共同開発依頼もお待ちしております。

## PRODUCTS

### 装飾瓦

## Woven Ceramic Echizen

瓦が織りなす、新しい建築の表情。江戸時代から続く「越前瓦」の伝統と、福井の地場産業「繊維」が融合した装飾壁「Woven Ceramic Echizen」。



装飾壁「Woven Ceramic Echizen」

素材の対比により、落ち着きと華やかさが共存する、記憶に残る上質なサロン空間の実現を目指しました。

「特注性の高い各建材の施工にあたり、設計・デザインの観点での課題をどのように克服しましたか。」

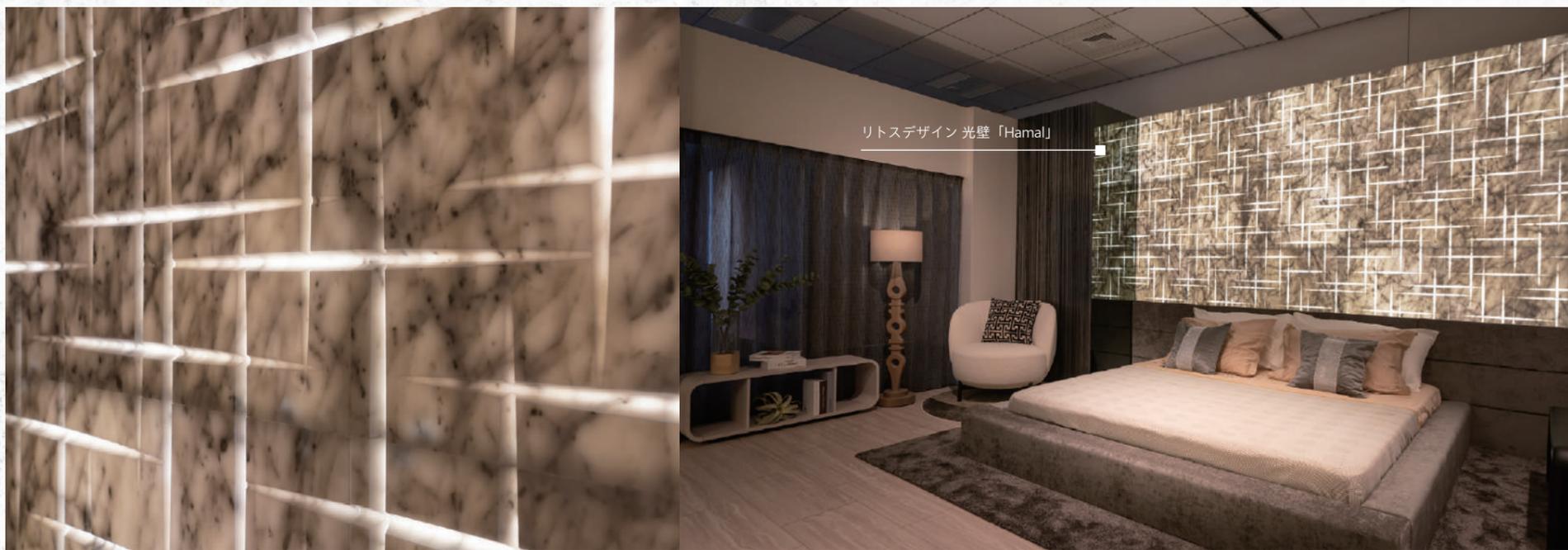
特注性の高い建材を扱う上では、図面上の完成度だけでなく、現場での再現性をどう担保するかが大きな課題でした。吉光工業様とは、割付や下地条件を早期にすり合わせ、施工誤差が意匠に影響しないよう段階的な確認を重ねました。Anonimo Design様の建材についても、重量や取り付けを考慮した施工手順を事前に共有し、設計意図と現場判断のズレを最小限に抑える工夫を行いました。こうした調整が、最終的な空間の質を支えていると感じています。

「プロジェクト完成後に来場者の方々からの反響はいかがでしたか。」

来場者の方々からは、「素材の背景まで感じられる空間」「落ち着きがありながら印象に残る」という声を多くいただきました。吉光工業様の装飾瓦については、内装材としての意外性と上質な陰影表現に驚かれることが多く、会話のきっかけにもなっています。また、Anonimo Design様の建材は、空間全体を静かに引き締め、ハイエンドサロンとしての信頼感や説得力を高めているという評価をいただいています。

PRODUCTS  
光壁

Hamal



リトデザイン 光壁「Hamal」

大理石の重厚感と、透過する光の融合。バックライト付き3Dモジュールが、今までにない魅力的な発光と装飾効果をもたらすリトデザインの光壁「Hamal」。

株式会社 Anonimo Design

「今回、イノベシアプレミアムサロンに施工された「リトデザイン Hamal」について教えてください。」

今回採用頂いた製品は、大理石などの石材特殊加工を得意とするイタリアのリトデザイン社の光壁「Hamal（ハマル）」です。リトデザイン社はヴェネツィアを中心としたヴェネト州に設立された会社で、邸宅やホテル、船舶、トップメゾンの店舗に至るまで、優れた石材加工でさまざまな意匠の実現しています。

今回ご採用頂いた光壁についてですが、通常石の光壁はオニキスなど光を透過する素材を使用したものが主流だと思えますが、リトデザインはそれを透けない大理石で実現した、という点がまず新しいところかと思えます。光を透過させるために石全体を薄くすると脆く、割れやすくなってしまうですが、デザイン

「大規模な施設での施工において、難燃性や安全基準にどのように対応されましたか？」

リトデザイン社の光壁は、スチールと石で出来上がっていますので、難燃性については心配しておりませんでした。ただ本石で20mm厚となるとそ

れなりの重量になりますので、下地を堅牢に作って頂く、という事は事前の打ち合わせでしっかり確認をしながら、進めさせて頂きました。また、光壁は電気工事と同時に必要となりますので、配線の経路、開口位置、サイズ、また電源装置の微細な振動に対するケアなどは、予め打ち合わせを重ねながら、丁寧に進めさせて頂きました。

「今後の製品ラインナップの方向性や、展開についてどのような展望をお持ちですか？」

大理石の光壁で、ユニット

化された商品というものは、今まであまりなかったかと思えますので、その点は今回の物件を知って頂くことでさらに認知が広がったら、という希望があります。一方でリトデザインは光壁以外に沢山の特殊加工をした製品がありますので、こちらもアピールをして参ります。今後も、石でしか出来ない加工や、意匠、また石で作ったからこそ感じられる重量感や、存在感、といった五感で感じるデザインといったものを、インテリアにおける満足感、充足感に繋げて行こうと思えます。

— 施主プロフィール

株式会社 翔洋

港区元赤坂 1-5-12  
住友不動産元赤坂ビル 8F  
TEL : 03-6850-3320  
http://www.shouyo.co.jp/



デザインマネジメント事業部所属

嶋田 陽子

モデルルーム、オフィス、商業施設等における空間設計およびインテリアデザインの統括を担う空間プロデューサー。五感を重視し、挑戦を続けながら、質の高い空間創出を通じて、ブランド価値の最大化に取り組んでいます。



— メーカープロフィール

株式会社吉光工業

福井県福井市高木中央  
2丁目510  
TEL : 0776-54-0706  
https://4432.co.jp/



代表取締役

一級建築士・一級技能士

吉田 知志

本業は屋根の専門工事業。瓦産業と文化の持続にむけて、建築家・窯元とチームを組み、地域の産業歴史から発想した Woven Ceramic を商品化。建築を楽しみましょう！



株式会社 Anonimo Design

東京都港区南青山 5-12-3  
小田急南青山マンション 701号室  
TEL : 03-3797-3904  
https://anonimodesign.com/



代表取締役

二級建築士

黒澤 哲

イタリア、フィレンツェでインテリアデザインを学び、その経験を活かした仕事をしています。イタリアに関することならなんでもご相談ください。



## マンション理事会

今回手すりを設置した横浜市Oマンションについて教えてください。

横浜市港北区にある低層4階3棟からなるマンションです。戸数は50戸余りで築後25年ほどになります。

今回の横浜市Oマンション屋外手すり工事はどのような内容のものでしたか。重視した点、こだわった点などがありましたら教えてください。

手すり設置後の時期にエレベーター設備更新工事を控えていて、その間エレベーターが使用できなくなります。階段を使う頻度が増えると考えられたので、これまで付いていなかった階段への手すり設置をマンション総会で決めました。屋内階段1ヶ所、屋外階段3ヶ所に手すりを新設しました。出来るだけ居住者の誰にでも安全に不安なく使えて、耐久性のある手すりを採用したいと考えました。

今回のプロジェクトにおいて、理事会様が最も重視されたコンセプトや、居住者様に提供したいと考えた「安全」や「付加価値」は何でしたか？

実施する際には、数社の合見積もりをしようと検討しました。「NEXTAIL®」は本体が樹脂被覆メッキ鋼管で耐久性があり耐候性も問題ないだろうと判断しました。手すりを導入することで入居者に安全性や安心感を提供することに加え、

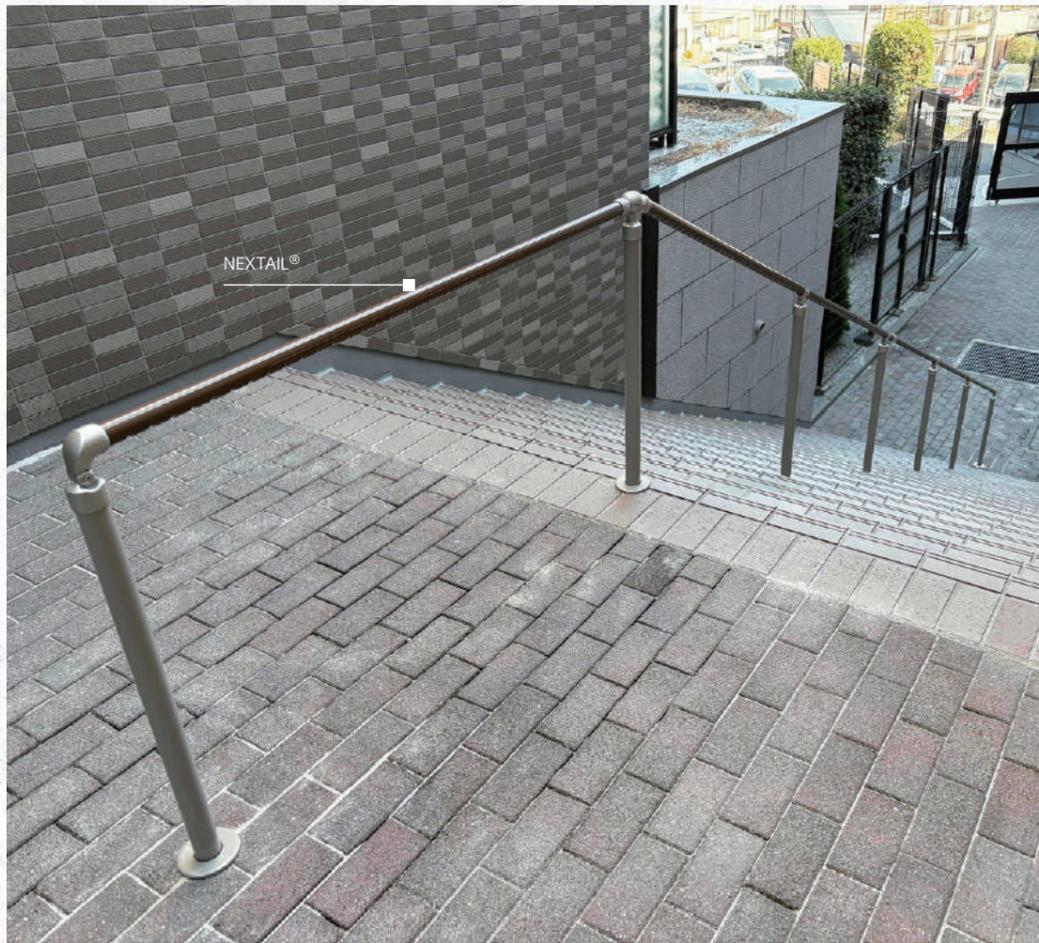
施工主

マンション理事会

建材メーカー

矢崎化工株式会社

マンション居住者に提供する、安全・安心な手すり  
広い場所で長く連続した構築が可能  
「NEXTAIL®」



PRODUCTS  
手すり  
NEXTAIL®

(右) 壁面設置タイプの手すり。長いスパンでの施工により、景観を保ちながら連続した安全動線を確保している。

(左) 「NEXTAIL®」を設置した屋外階段。アーバンシルバーの支柱とブラウンのレールが建物の外観に調和。滑りにくく握りやすい「スキップディンプル」形状のレールが、安全な昇降をサポート。

## 矢崎化工株式会社

今回、横浜市Oマンションに導入された共用部手すり「NEXTAIL®」について教えてください。

「NEXTAIL®」(ネクステール)は、2023年2月に新しい屋外手すりシリーズとして発売しました。

20年以上にわたって培ってきた手すり開発のノウハウを生かし、デザイン性、施工性、コストにこだわった製品となっています。支柱には、近年の住宅外観に溶け込むアーバンシル

バーを採用しました。レールはお客様のお好みで選べる6種類のカラーバリエーションが好評をいただいています。発売当初、冒険した色だと感じていたネイビーも人気が高く、すっかり定番色として定着しました。

「NEXTAIL®」はどのような点で他社製品との差別化を図られているのでしょうか。

機能性を重視した当社独自の「スキップディンプル®」は変則的なディンプル形状で、滑りにくく握りやすいと評判です。支柱の最大取付スパンは1500mmとなっており、支柱本数の削減、施工の間隔の軽減が可能です。最大取付け高さも1000mmとなっており、手すりを使用される方や施工現場の事情に合わせて自由に手すりを構築いただけます。

「NEXTAIL®」が横浜市Oマンションへ導入された経緯と、施工後の手応えやご感

直接の決め手はコスト的にも優位だったことです。

「NEXTAIL®」は、集合住宅の共用部の景観やグレイド感にどのように貢献するとお考えになりましたか？

既存の集合住宅への設置です。後付けとなりますが、景観上も違和感ありません。手すりを設置する意図は、まさしく幅広い入居者の安全や生活の質の向上に貢献するためです。また、当マンションの居住者の方々が、今後高齢化するという想定のもと、階段通行時の事故防止にも役立つと考えています。

「NEXTAIL®」の設置が完了した後、期待通りだった点、あるいは予想を上回った点があれば教えてください。また、設置後、居住者様や管理組合様などから何か具体的な反響はありましたか？

取付け工事は丁寧で確実にやっていたのだと思っています。設置後の居住者や管理組合・理事会の受け止めも良かったと思います。

今回、建材ナビを通して「NEXTAIL®」を導入になりましたが、建材ナビを使用してみたいかと思いましたか？

建材ナビのような専門サイトから継続して情報提供を受けるといったことは、有用な情報や建材に出会えるきっかけが増えるなど感じています。

## — 施主プロフィール

### 横浜市Oマンション管理組合

同 理事会メンバー  
K 氏

手すり取付け時のマンション理事会メンバーの一人。前年に実施した大規模修繕工事にも修繕委員会の一員として対応。



## — メーカープロフィール

### 矢崎化工株式会社

静岡県静岡市駿河区小鹿2丁目24番1号  
TEL : 054-281-8867  
<https://www.yazaki.co.jp/>

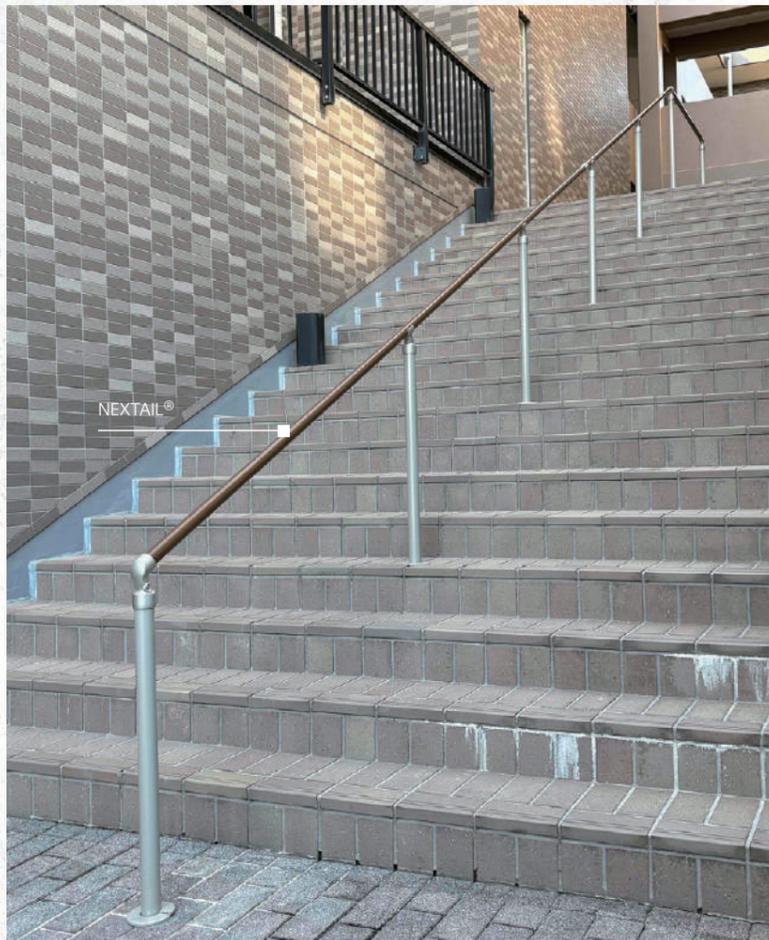


神奈川支店 福祉介護課 勤務 課長  
西尾 和正

生産部門から2015年に営業部門へ配属。つくる事・売ることが出来る矢崎化工が生んだ二刀流。担当者より一言、「NEXTAIL®を売って売って売って参ります」。



20年以上の開発実績を持つ矢崎化工が贈る、次世代の屋外手すりシリーズ。耐久性に優れた樹脂被覆メッキ鋼管を使用し、建物のグレイド感を高める豊富なカラーバリエーションを展開している。



PRODUCTS  
手すり  
NEXTAIL®

築25年を迎え、計画的なメンテナンスが進む低層マンションの全景。エレベーターの更新工事を控えたタイミングで、階段への手すり新設など、住人の安全を第一に考えた環境整備が行われた。

想をお聞かせください。

今回、建材ナビを通じてマンション管理組合・理事会様から手すり施工のご依頼をいただきました。

まずは理事会様のニーズを確認させていただき、その上で手すり施工業者とのマッチングをさせていただきました。その後、理事会様にて手すりイメージや見積内容をご確認、承認いただき、実際に施工という流れになりました。当社の手すりは個人住宅での需要がほとんどであるため、横浜市Oマンションに施工された手すりを見て非常に新鮮な印象を抱きました。マンション外観に非常にマッチしており、大変うれしく思います。

今回の集合住宅への納入事例を通じて得られた「新しい発見」や今後の製品開発・市場展開に活かしていきたい展望についてお聞かせください。

マンションなどの共同住宅、公共施設などでの手すり需要はまだまだあると思われれます。

「NEXTAIL®」は支柱最大取付けパンが大きいいため、広い場所で長い連続手すりを構築することに向いています。

長年にわたり介護保険市場の中で手すりを販売してきましたが、建材ナビを活用することでこれまで当社をご存じなかった方々とのつながりができてきていると感じています。今後、もっと当社のことを知っていただき、幅広い市場でのニーズを取り込み、当社手すりの市場開拓を行っていただければと思っております。

新たな時代に  
適応する解決策を、  
多様な選択肢から

建材メーカーのこと、建材業界のこと、製品はどのように生まれるのか、施工実績がどのように社会に影響を与えるのか、ものづくり企業としての、苦労や喜びなどの想いをたっぷり語っていただきました。

建材メーカーへのインタビューは、建材ナビのインタビューコンテンツ「すまいりんぐ」でも同時紹介しています。

SumaiRing



#01

CAN' BRICK

理想の空間づくりに  
寄り添うブランドとして

キャン' エンタープライゼズ株式会社

#02

DuPont™ Xavan®

デュポン™ ザバーン®  
防草シートで  
草刈りが不要に

株式会社グリーンフィールド



# 「素材×仕上げ×デザイン提案」の一体化を CAN, BRICKシリーズに加え、エクステリア向け新製品も開発 理想の空間づくりに 寄り添うブランドとして

お客様の理想の空間づくりに寄り添うブランドとしての役割とは

キャン、エンタープライゼズは創業以来、代表製品であるブリックタイル「CAN, BRICK」をはじめとした

セメント二次製品の開発に取り組み、「we can make your dreams come true」というスローガンのもと、誰もが一度は憧れる「海外で見たようなレンガ張り・石積み空間」を日本で再現するための建材づくりを続けてきた



(左) 堅牢な意匠で英国の伝統的なレンガ積み建築を再現する、ブリックタイルケンブリッジ (CB)。経年変化による欠けや汚れの表情までも忠実に模し、重厚感のある壁面を演出。  
(右) イギリスの古レンガをモチーフとして作られたブリックタイルCAN'BRICK「マンチェスター (MC)」を外壁に使用したマンションファサード。

い」という想いから、特にこだわったのは商品の物性と長期耐久性でした。そこで社内技術室を新設し、配合・養生条件・骨材の研究をゼロから積み重ね、JISタイルと同等規格の物性をセメントで達成するという目標に挑みました。

その結果、他社製品と比較して2.5~4倍の耐久性を持つCAN, BRICKシリーズが誕生しました。日本国内製造であること、そして日本基準で物性を徹底的に追求する姿勢が、この品質を支えています。もう一つの強みは意

した。

私たちが目指してきたのは、単にレンガ調のタイルを提供することではありません。どのような貼り方が最も美しく見えるのか、開口部はどう納めるべきか、施工後どのように表情が育っていくのか——。創業時から、素材だけでなく「空間の仕上げ方」まで含めた提案型のメーカーとして、欧米の実際の積み方や経年変化の魅せ方を研究し続けてきました。現在では、ブリックだけでも13シリーズ40品番、目地材も15色に拡大し、本物志向のユーザーや設計者の細かな要望に応える体制を整えています。私たちが「本

匠の再現性です。「セメントで、どこまで本物のレンガの風合いに迫れるか？」このテーマは創業以来の研究課題であり、表面の陰影、色ムラ、経年変化の出方まで、職人技と新たな技術を組み合わせながら探求し続けています。

## 2Dの平面素材として磨いてきた技術を、3Dの構造物へと発展させる

現在、当社が特に力を入れているのが、外構・エクステリア領域に向けた新しい建材開発です。これまでCAN, は主に壁面材としてのブリックタイルや擬石を展開してきましたが、外構分野では求められる物性が異なり、新しい開発が必要でした。従来のタイルは「2Dの平面」への使用を想定して設計され、雨水を正面から受ける想定が少ない一方、外構商材——例えばファイヤーピットやトップレール、トップキャップのような立体物（3D構造）は、天面が露出し、雨水・紫外線・

物に忠実であること」にこだわるのは、それが時間やトレンドが変わっても空間の価値を損なわず、長く愛され続ける美しさを宿すからです。

## CAN,の強みは、物性と意匠性の2軸で本物を追求する姿勢

当社の主力商品である「CAN, BRICK」は、輸入住宅ブームの最盛期だった90年代後半に誕生しました。セメント二次製品として開発したタイルですが、「お客様が一生に一度の買い物として選ぶ住宅にふさわしい建材でありた

温度差・摩擦など、より過酷な環境にさらされます。

そこで当社は、これまでの物性配合だけでは対応できない課題に向き合い、天面侵食に強い新しい物性や、吸水・乾燥サイクルに耐える結合強度の最適化といった「外構専用の材料設計」に取り組んでいます。特にファイヤーピットは、熱の影響と屋外環境が複合する特殊な用途であり、CAN, としても新しい分野への挑戦となりました。DIYでも扱いやすい構造でありながら、耐久性と意匠性の両立を目指し、複数のパターンの試験を重ねています。ブリック・ストーンと質感を揃えたトップレールや天端材の需要が高まっていることも、私たちが外構分野を強化している理由のひとつです。

これまで2Dの平面素材として磨いてきた技術を、3Dの構造物へ発展させること。これが、現在のCAN, が最も注力している新領域であり、今後の製品群にも広がっていく重要なテーマです。



キャン'エンタープライゼズ株式会社

内海 健人

UCHIYAMA KENT

キャン'エンタープライゼズの商品開発責任者。レンガや石のデザイン、欧米での素材づくりの考え方を取り入れながら、ブランドコンセプトに沿った建材企画を担当。外構商材の企画にも取り組み、製品の世界観づくりを推進している。

キャン'エンタープライゼズ株式会社

神奈川県川崎市中原区

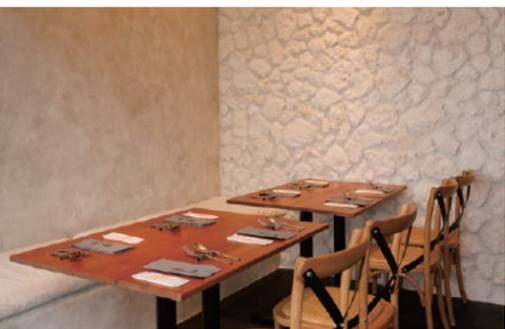
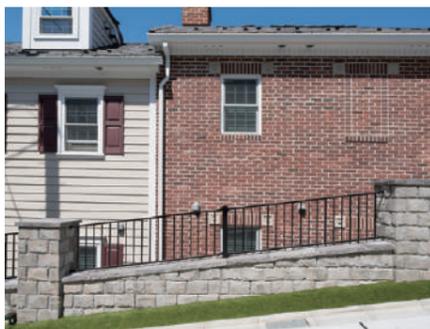
木月4-28-3 SJビル2F

044-433-5001

<https://www.can-net.co.jp/>



笠木・笠石 トップキャップ&トップレール (Cap & Top Rail) 安山岩のような質感のトップキャップ。角柱天端納めに最適。推奨コンクリートブロックサイズは390x190x100mmで、500角の角柱を作成できる。



(左) 焚き火台 ファイヤーピット (Fire Pit) 分割式モジュール構造により、専門知識がなくてもDIYで最短10分の簡単施工を実現。住宅外構やガーデン設計といったプロユースにも対応。

(右) CAN'STONE「Color-コラー (COR)」珊瑚や貝が堆積して生まれた天然石灰岩の表情を精緻に再現。本石比約1/2の軽量性と安定した品質で、多様な空間設計に応える擬石壁材。

あらゆる場所の雑草対策はこれで万全

# デュポン™ ザバーン® 防草シートで 草刈りが不要に

日本では存在しなかった  
〈防草シート〉による雑  
草対策を初導入

株式会社グリーンフィー  
ルドは1997年、米国や  
欧州で販売されていたデュ

ポン社ザバーン®防草シ  
ト(Xavan® Weed  
control fabric)  
を日本へ輸入して販売を開始  
した第一人者です。

当時、日本では防草シート  
という単語や地面に防草シ

トを敷いて雑草を防ぐなど  
という概念はなかった為、その  
工法を説明し理解してもらう  
ことに苦労しました。手っ取  
り早く体験してもらうことを  
目的に、官公庁などへ出向き  
雑草管理に困っている敷地を  
教えてもらい、許可を得た上  
で敷設し、その効力を実際に  
体験していただきました。様々  
な方々に試験施工を提供し、  
その結果にとっても重宝され受  
注に繋がられる嬉しさの一方  
で、造園業者さんには「私ら  
の除草作業の仕事を取るのか」と  
怒られたこともありました。  
1999年当時、インター  
ネットは現在のように一般的

ではありませんでしたが、弊  
社はいち早くウェブサイトを  
開設し広く情報開示を行いま  
した。通販業者様からは、  
1m x 3.3mの畳んだサイズ  
のご注文を何千個もいただき、  
3名しかいない従業員で夜遅  
くまで出荷作業をおこなった  
こともありました。

## 2000年の歴史を持つグ ローバル企業デュポン社 からの直接仕入れに成功

創業当時の弊社は信頼度も  
低く、直接デュポン社から仕  
入れることが困難であったた  
め、ある販社経由で仕入れる

ことになっていました。当初  
はその販社より全国に自由に  
販売する権利を有してしまし  
たが、売り上げが上がるにつ  
れて販売権について様々な制  
約を強要されるようになりま  
した。結果的に今までの功績  
を認めてもらいデュポン社か  
ら直接仕入れることが可能と  
なり、現在ではザバーン® 国  
内総販売元として全国への普  
及に努めております。

## 〈デュポン社ザバーン®〉 の優れた製品性能に更な る高スペックをプラス

デュポン製ポリプロピレン

独自で開発し製品化すること  
で更なる差別化を実現。また、  
ザバーン®に骨材をコーティン  
グした製品で20年耐候品など、  
今後より良いシートを開発  
していくことが弊社の使命で  
あると考えております。

## ザバーン®は、あらゆる 場所での雑草抑制ニーズ に対応

ザバーン®はその強靱なシー  
トの特性から強雑草であるス  
ギナ、チガヤ、ヨシ、ハマス  
ゲを抑制することが可能であ  
り、シートの上に碎石を敷い  
て車両が通行しても破れるこ  
とはないという強靱さを持ち  
ながら抜群の透水性があり、  
フィルター機能を兼ね備えて  
います。これらの機能性より  
民間の戸建て住宅の周囲から、  
アパート、マンション、商業  
施設や工場まわり、道路、河川、  
公園、教育施設、自衛隊、線路、  
高速道など様々な場所で雑草  
抑制シートとして長年ご愛顧  
いただいています。  
実際に現場で草刈りを行い



太陽光発電設備下(左)と遊水地(右)という異なる環境で採用された「デュポン™ ザバーン® 防草シート」。高い耐久性と透水性を兼ね備え、長期にわたり雑草の繁茂を抑制。メンテナンス負荷の軽減と景観維持を両立する。

製スパンボンド不織布は4層  
構造で縦横無尽に重ね合わせ  
た特殊加工の極太繊維を交点  
で熱融着している類のない抜  
群の強度と寸法安定性を持ち  
ながらも薄い仕上がりで、軽  
く高い施工性があります。こ

の性質にプラスして、日本特  
有の四季による寒暖差への耐  
候性や高温多湿に生息する雑  
草に対応する強度から更に高  
いスペックをデュポン社に開  
発してもらいました。そのう  
え、施工方法や固定部材など

## ザバーン® 防草シート以外にもこのような製品を取り扱っています。



リアリーターフ® 高機能人工芝



GG ハニカム™  
(基材:デュポン™ ザバーン®)



ビスタフォリア®  
人工壁面緑化パネルと擬木



ジスタス®500G 20年耐候品  
(基材:デュポン™ ザバーン®)



ザラグリフ® 滑り止め耐候品  
(基材:デュポン™ ザバーン®)

雑草の特性を知り、シートを  
敷設し、経過を観察すること  
は社訓の一つである現場主義  
を徹底し、新たな商品開発へ  
と繋がっています。

高品質で胸を張って推奨で  
きる商品を取り扱い、困って  
いるお客様に寄り添い問題を  
解決できることが社員のモチ  
ベーションになっております。

# すぐに見つかる 建材カタログ

掲載数  
**6,500** カタログ  
**30,600** 施工写真



**Kenzai-Navi**  
建材ナビ

無料利用! 今すぐ「かたなび」で検索! /

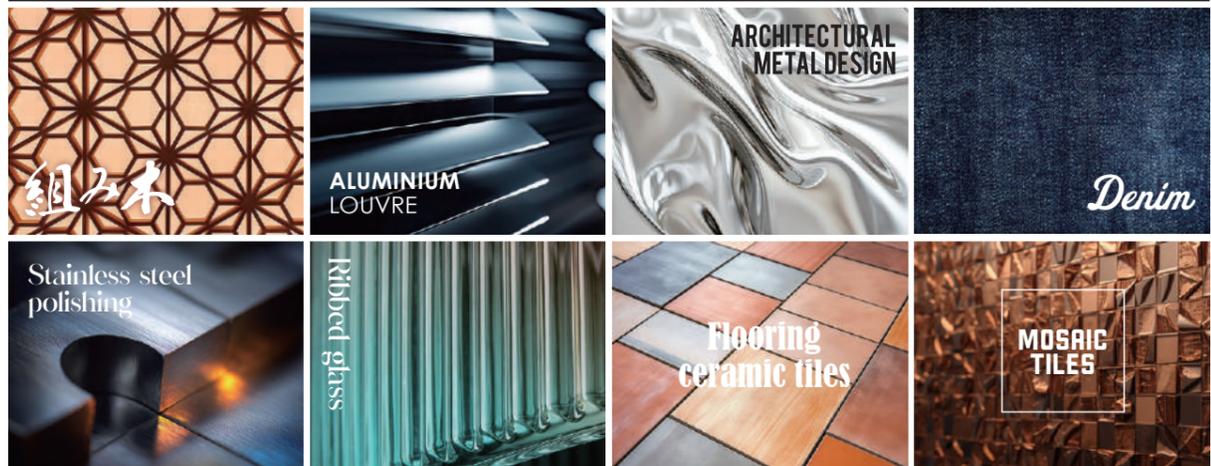
カタログ閲覧、ダウンロード、お見積り依頼が  
簡単だから、スペックインに便利!!

かたなび

## カタログ探しが楽しくなるイベントも開催中!

【新年】	【春】	【秋】	【年末】
<b>先取り新着</b> どこよりも早くお届け 先取り新着カタログ	<b>最新カタログ勢ぞろい</b> 感性を形にする 最新版が勢ぞろい	<b>総合カタログ</b> 素材の質感まで全て揃う 最新総合カタログ	<b>年間総まとめ</b> 今年最後の総まとめ 厳選カタログ一挙公開

## 30,000枚の施工写真。その『質感』があなたの感性を形にする!



# SumaiRing

すまいりんぐ

## 過去の 建材ナビジャーナルが 読める!



豊富な  
インタビュー記事  
をお楽しみください。

**Kenzai-Navi**  
建材ナビ

お役立ちコラムやインタビュー満載! /

すまいりんぐ



## SumaiRing にしかないオリジナルコンテンツもたくさんあります!

### SPECIAL 建築・建材業界のニュースや著名人へのインタビュー



### STORY 建材ナビを通じてコラボに至った設計士と建材メーカーのプロジェクト紹介



### ARCHITECT

プロフェッショナルな設計士へのインタビューと設計事務所の紹介



### MANUFACTURER

建材メーカーにモノづくりの想いを語っていただくインタビュー記事



### COLUMN

建材や建築のことをわかりやすく紹介するコラム

